

中島敦の南洋作品の形成における土方久功の 影響：「鶏」を中心に

YAN, Yu / 閻, 瑜

(出版者 / Publisher)

法政大学国際日本学研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

INTERNATIONAL JAPANESE STUDIES / 国際日本学

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

93

(終了ページ / End Page)

109

(発行年 / Year)

2015-01-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022483>

中島敦の南洋作品の形成における土方久功の影響

——「鶏」を中心に——

閻 瑜

はじめに

中島敦は1941年6月から翌年3月まで南洋庁に内務部地方課国語編集書記として赴任した。南洋へ行く前に、サモア島で生涯を終えたスティヴンスンに感情移入して書かれた南洋への憧憬がつまった「光と風と夢」があり、南洋から戻った後、「南島譚」「環礁」を総題にした短篇など南洋を舞台とした作品は9篇もあり、全作品数の3分の1強を占めている。そして、生前それぞれ『光と風と夢』（筑摩書房、1942年7月）と『南島譚』（今日の問題社、1942年11月）をタイトルとした単行本が出版されており、いずれも当時の文壇で際立つ存在となり、好評を博している。さらに、南洋から帰ってから亡くなるまで10ヵ月の間に、「弟子」「李陵」「名人伝」などの名作を集中的に書き上げることも注目すべき事実であろう。南洋滞在の経験は中島敦作品の形成において大きな存在であることが推測できる。ところが、従来の中島敦研究は中国古典を下地にした「山月記」「李陵」といった作品群に目を向けている傾向があり、南洋物についての研究が殆ど行われていないという現状である。

本稿はまず中島敦の主な南洋作品群である『南島譚』にある「鶏」に焦点をあて、南洋通で彫刻家・民俗家でもある親友土方久功の現地調査の日記や原稿を調べ、それらと中島の作品との相違点を見つけ、そして、時代背景と結びつけて作者の創作の意図および時代意識を明らかにしたい。

一、中島敦と土方久功の親交

中島敦は南洋庁教科書編集書記として南洋庁に赴任していた時、彫刻家、画家、民俗学者である土方久功(1900～1977)と親しく交友し、親友関係を結んだ。まず、土方久功について記しておきたい。

彫刻家であり画家であり日本初代の民俗学者ともいえる土方久功は若い頃から世界の民俗文化に関心をもちはじめ、日本美術界が傾倒した近代西洋美術に反映するアフリカや南洋などの「未開文化」を自己の美術表現に直接吸収するため、1929年、29歳の時、日本の委任統治領であったパラオ諸島に渡った。

彼は最初の2年半はパラオに住み、昔話の収録、民芸品の収集などの野外調査を行いながら島々を巡っていた。1931年9月に人口わずか380人の離島サタワル島(サタワルはサテワヌとも表記される)に渡り、島の言葉を覚え、習俗や民話を記録し、島民の相談ごとを聞き、7年間滞在していた。戦前、南洋群島で合計14年暮らしたことがある。彼は調査とともにスケッチ活動も精力的に実施し、特にパラオ芸術のア・バイ絵に魅了され、木彫レリーフに独創性を発揮し、金属刃を縛り付けた木製の手斧カイバックルを用いて南洋樹を彫り、素朴なレリーフを数多く制作していた。このパラオの神話伝説の場面を刻んだ横長の木のレリーフはパラオの島民に伝承され、現在パラオの代表的な土産物として人気を博している。今パラオ・パシフィック・リゾートホテルには、彼の作品が多数飾られている⁽¹⁾。

その後、土方は再びパラオへ行った。パラオに滞在していた間に、赴任してきた中島敦と親しくなっていた。1942年3月4日に中島とサイパン丸に乗って帰国し、同月17日に横浜に着いたのである。

帰国後、土方は引き続き木彫レリーフや彫刻の制作を行い、日本と南洋を融合した表現の成果を、個展をはじめ日本アンデパンダン展、読売アンデパンダン展、新樹会展、新しき村展などで積極的に発表した。さらに、執筆活動及び著作に掲載する挿絵の制作を旺盛に行い、南洋記録集『パラオの神話伝説』(大和書店、1942年11月)、サタワル島の生活の有様を日記風に綴った『流木』(小山書店、1943年3月)、日記の断片を収録した『文化の果てに』(龍

星閣、1953年9月)、南洋島での浪漫的な心の遍歴の表わしとしての散文詩をまとめた『青蜥蜴の夢』(私家版、1956年6月)など南洋を記録した著作をはじめ、南洋を題材にした絵本など多様な著作を出版した。晩年は、身近なものを題材に水彩画を描き、特に過去に制作した南洋作品を基にした水彩画を、明るい色彩と力強い描線で表現していた。

中島敦がそれまで勤めていた横浜高等女学校をやめ、南洋庁地方課に所属する国語編集書記としてコロールに赴任してきたのは、土方が長旅から戻って間もない1941年7月6日のことであった。土方の日記には、同年7月18日の項に初めて「中島敦君」が出てくる。その後、2人は急速に親しくなり、土方は中島のことを「敦ちゃん」(トンちゃん)や「トン」と呼ぶようになった。中島は学歴が高ただけで南洋庁地方課では高い給料をもらいながら、赴任して間もなく大腸カタルやデング熱を患って病欠ばかりするため、同僚たちに冷遇されていた。官僚嫌いな中島にとって、南洋庁での勤めは「蠟を嚙むどころではございませぬ」⁽²⁾というほど嫌であった。土方の回想によると、中島は「南洋ではほんとに淋しかったのだ。私以外のものとは、笑顔とつまらない冗談以外には殆ど何も話さなかった」⁽³⁾のである。その時、彼の大きな救いは唯一の話し相手である土方久功であったと言われている。中島の妻タカの言葉を借りれば、「南洋では土方先生に肉親も及ばぬ御親切を戴いた」⁽⁴⁾のである。一方、「お役人臭と云うものを全然身につけていなかった」土方は、中島の博識と才能に尊敬の念が湧くばかりで、彼の人柄も大変好きであった⁽⁵⁾。土方久功の研究に詳しい岡谷公二氏は2人の親密さについて次のように記している⁽⁶⁾。

敦は、久功の家で、わが家のように振舞っている。二人の親密さは、もうこのように全く分け隔てのないところまで来ていたのである。久功の日記によると、敦は、朝、昼、晩と一日に三度もやってくることさえあって、いわば入り浸りの状態だった。(略)

久功を中心に、久功の島民の友人、知人もまじえ、談笑に花が咲き、時には酒宴ともなり、パラオの夜が賑やかに更けてゆくのがあった。

敦は、このような集まりで、久功から南洋群島のさまざまな興味深い話をきいた。(略) そればかりか、敦は、久功から、その日記を勝手に読

むことを許された。

中島が「朝、昼、晩と一日に三度も」土方の家に行って、また土方の「日記を勝手に読むことを許された」ことから、南洋時代、中島と土方がいかに親しかったか、垣間見ることができる。

帰国後も2人の交友は続いた。しかし中島の方は、東京のきびしい寒さにやられ、早々に喘息や肺炎をおこし、1942年6月頃まで半ば病臥の状態であった。そこで、2人はよく書信を交換し合っていた。岡谷氏によると、この頃、中島は人に葉書を出すのに、常に土方の描いた南洋風景の版画の刷りこまれている絵葉書を用いていたという。また、その帰国して半年後、土方の結婚式が行われた。土方側の出席者のうちの友人は、東京美術学校以来の友人の三沢寛と中島敦だけであった。学習院時代の友人たちや、旧『炬火』⁽⁷⁾の同人たちをさしおき、知り合ってまだ1年余の中島敦を呼んだ事実は、土方が中島との友情をいかに重んじていたかを示している。また、中島敦の孫の卒業論文のテーマは土方久功であったという。ほかに、中島が亡くなった後、土方は終生タカ夫人と2人の遺児との交際を絶やさず、筑摩書房(1948～49年)と文治堂(1959～60年)の中島敦全集に進んで協力し、時には編集委員となり、装幀までも引受け、全面的に協力した⁽⁸⁾。近年出版された筑摩文庫版の『中島敦全集』(1993年)の表紙は土方の版画が使われている。これらの事実から、土方と中島の友情の深さがうかがえる。

二、土方久功の「鶏」と中島敦の同名小説「鶏」

中島敦は南洋に滞在した時、創作の種を探すために、土方が集めた昔話を自由に閲覧できることが許されていた。中島の南洋作品群はパラオで知り合っただけの親友となった詩人・彫刻家・民俗学者の土方久功に負うところが大きいと、鷺只雄氏⁽⁹⁾や川村湊氏⁽¹⁰⁾などがすでに指摘されている。

中島敦の南洋作品はすべて彼の第二の単行本『南島譚』(今日の問題社、1942年11月)に収められている。その中の「幸福」については拙著で論じている⁽¹¹⁾が、ほかに土方と関連の深い「マリヤン」や「ナポレオン」に関して

は別稿で取り上げたい。ここでは「鶏」という作品に焦点をあてて考察したい。

中島敦は土方久功の日記に書かれている「鶏」に基づいて同名小説「鶏」を創作したと考えられる⁽¹²⁾。ここでは、土方久功の日記に書かれている「鶏」と中島敦の「鶏」に焦点を当てて比較してみたい。

『土方久功著作集』第6巻に収録されている「鶏」には、「以上は私の当時の日記の一節であるが、私は少し後日譚をさせて貰う」とあるように、当時の日記の一節と後日譚という二つの部分に分けられる。後日譚は中島が「鶏」を創作の素材にする経緯を記している。後日譚の一部を引用する。

もう大分前に亡くなった中島敦は、パラオに来ていた頃、毎日かかさず私の家に入りびたっていた。そして私の日記帖をあちこち引きずり出しては読んでいたが、時々「土方さん、この話、僕にくれませんか」と言った。「ああ、どうぞ」と私は答える。こんな話を、話のまま私が持っているよりも、敦が何かの材料に使ってくれた方がいいにきまっているから。

その後一向、私から持って行った話がものになったということをきかなかったが或る日、友人が一冊の本を持って来て「君のことが書いてあるよ、まだ読んでなければ上げよう」と言ってその本をくれた。見ると中島敦の「南島譚」で、この鶏話もその中に出ていた。後に未亡人に会った時、その話をしたら、「敦があればはずかしいから土方さんにはあげない、とって、上げなかったのです」といっていた。

敦の鶏話のマルクップは、およそこのギラメスブズとは違うが、あのウォルサムの時計盗人はまた別にあるのである。私がガラツ村に居た時、家の留守居兼料理人として、片脚どうしたのか膝から下がちょんぎれている、アマラエルという爺さんを家においたことがある。この爺さんがまた実に忠実に、何でも気をまわして、料理から掃除から、恐らくは退屈まぎれからでもあったろうが、よくも思うほど、不自由ないざり姿でやってくれたが、それが或る時どうした出来心か、私の目の前で金を盗んで、頑として唾になり糞になってしまったことがあった。結局、一時間もして、赤くなって持ちあげた半分脚の下からその金が出て来たのだった。

さて作家と言うものは、ただこれだけの材料があれば結構気のきいた短編小説を書いてしまう。

上記の後日譚に書かれているように、中島が土方の日記を自由に読み、それを小説の材料として使っていたことは確認できる。また、「これだけの材料があれば結構気のきいた短編小説を書いてしまう」というふうには、土方は作家中島への創作の才能に敬服の意を抱いている。

以下、土方の「鶏」の中の「当時の日記の一節」という部分を中島の「鶏」と比べて検討してみたい。

土方久功の日記にある「鶏」と中島敦の同名小説「鶏」のあらすじはほぼ同じで、次のようである。

恐ろしげな顔とは似てもつかない優しい心を持ったお爺さんは彫り物が上手で、頼まれた木彫りの小道具などをいつも丹念に彫って持ってくる。このお爺さんはひどい病気に悩み、島の病院を長いこと通っても治らないため、ドイツから持ってきた薬を島民に施し、評判を得ているドイツの宣教師レンゲさんに見てもらいたいが、島の病院のお医者さんにこのことを言うのが怖いので、病院長と親しい私に頼んだ。

私は早速病院長にそのことを話し、再びお爺さんを訪ね、レンゲさんのところに行って病院の許しを得てきたと告げるがいいと言った。その後、お爺さんは間もなく亡くなった。「僅かこれだけのことを正直なお爺さんがどんなに恩にきたかを、後になって私は知ったのだ」。ある日、一人の若者が「生きた鶏」を一羽届けに来た。翌日も、一日おいた翌々日も、違う島民からまた「生きた鶏」を持ってきた。これは、お爺さんが「確かな上にも確かであるようにとの心から、二人にも三人にも、それも念をおして言いつけたものとみえる」と分かったのである。私はお爺さんの行動に大変感動した。

(一) 土方久功の日記にある「鶏」

土方久功の「鶏」は以下の要素に分けられる。

- 1、人物：ギラメスブズ爺さん、コロール島のアラバケツ部落の者
- 2、容貌：顔の下半分が、真っ白とまでいかない汚れた髯にうずまり、ぎろぎ

ろときつい眼

- 3、性格：その恐ろしげな顔とは似てもつかない優しい心を持った爺さんで、彫りものが上手で、いつも私に頼まれた人形や民芸的な木彫りの小道具などを丹念に彫っては持ってくれる。
- 4、事件：①人形や民芸的な木彫りの小道具を作ってもらおう。
②下腹がはって、のべつに痛む。
③主治医の変更について私に頼む。
④爺さんは間もなく亡くなる。
⑤お爺さんは恩返しとして、生前雄鶏を3羽違う人に持ってくるように頼む。
- 5、私の感想：

(1羽の鶏を受けた後) 私は爺さんの死をあわれみ、死ぬまで私のことを気にしてくれていたことに感動した。

(もう1羽の雄鶏を受けた後) 私は爺さんが最後まで、私のことばかり考えてくれたことに、さらに感動し、爺さんの霊に対して一言礼を述べ伝えたい気持とともに、何か妙な愛惜をおぼえて目頭があつくなった。

(もう1羽の鶏を受けた後) 私はもう悲しくなかった。こんな純粋な気持、こんな一途な気持——それを若い頃まで、互に戦争ばかりしていた、そして死首を得てはブラオル首踊を踊って村々をまわった島民が持っていたことを知り、ただただ敬虔な何者へともない祈りを祈ったのであった。常々この目で見、この耳で聞いて知っているように、個人と個人の集まりであるところの群集とは全く別なものなのだ。そうだろうか、それともそんなにも優しい心と、そんなにも残忍な行為とが、どこかで摺れ合うことがなくて済むものだろうかと思うようになる。

(二) 中島敦の小説「鶏」

続いて、中島敦の「鶏」を同じように取り上げてみたい。

1、前置き

- ①公学校の新任先生を紹介する風景
- ②南洋の島民の気持ちは飲み込めない

2、鶏に関する物語

- ①人物：マルクープ爺さん
- ②容貌：ひどく老衰しているように見えるが、実際は60歳前。僵僕らしく、何も前屈みになって乾いた咳をしながら歩く。目瞼が著しくたるんで下垂している。殆ど目をあけることが出来ない。
- ③性格：欲深い
 - (1) 魔除・祭祀用器具事件：民間俗信の神像や神祠などの模型を蒐集していた「私」は魔除・祭祀用器具作りをマルクープ爺さんに頼んだが、謝礼の相場を次第にどん上げるだけでなく、お金欲しさに怪しげな贋物を持って来る。
 - (2) 島民の摘発事件（「神様事件」）：パラオ在来の俗信とキリスト教とを混ぜ合わせた一種の新宗教結社が島民の間に出来上がり、それが治安に害ありと見做され、其の首脳部に対する手入が行われていた。当局は島民間の勢力争いや個人的反感などを巧みに利用し、着々と摘発検挙をすすめていた。検挙は大部分島民の密告を利用するが、マルクープ爺さんの密告によって、多くの人が捕まえられ、彼自身も相当多額の賞金をもらった。金が欲しさに親しい友人まで裏切るような下劣な奴に、もう仕事を頼みたくないと「私」は思う。
 - (3) 懐中時計の盗難事件：島民を密告したことで「私」に叱られたマルクープ爺さんは机の上に置いた「私」の懐中時計を盗み、再び「私」の前に現れなかった。
- ④咽喉が詰まるようで呼吸が苦しい。
- ⑤主治医の変更について「私」に頼む。
- ⑥爺さんは間もなく喉頭癌とか喉頭結核などで亡くなる。
- ⑦爺さんは恩返しとして、生前牝鶏を3羽違う人に持ってくるように頼む。

3、「私」の感想

島民の生活において鶏が如何に大切なものとされているかを熟知してい

る「私」は、3羽の生きた牝鶏を前にして、少からず感動した。しかし、これは院長に斡旋した私の親切への感謝か、私の時計を失敬したことへの謝罪かは分からない。結局、「私」は印象に残された彼の奸悪さと、鶏の贈り物とをどう調和させて考えればいいか分からない。「人間は死ぬ時には善良になるものだ」とか、「人間の性情は一定不変のものではなく同じものが時に良く時に悪くなるのだ」とかいう説明には満足できない。「人間は」というのではなく、「南海の人間は」という説明を「私」は求めているのかもしれない。

(三) 二つの「鶏」の相違と中島敦の変更

以上の比較から、中島は土方氏の日記から「鶏」という話の素材を取ったということが確認できる。両者の相違点は次の表にまとめられる。

	「鶏」(土方久功)	「鶏」(中島敦)
前書き	無し	公学校の新任先生の紹介の風景、南洋の島民の気持ちは飲込めない
お爺さんの名前	ギラメスブツ爺さん	マルクープ爺さん
病名	下腹が痛い	咽喉痛、咽喉結核
事件	巧みな小道具の製作、病気の治療を頼む	道具の製作、神様事件の密告、病気の治療の頼み、懐中時計の盗難事件
お爺さんへの態度	感謝、感動	感動のほかに、嫌悪、彼の奸悪と鶏の贈り物とは調和できない
お爺さんの人物像	正直、恐ろしげな顔とは似てもつかない優しい心を持った爺さん	よくニヤリと笑う奸悪、貪欲な爺さん
鶏の種類	雄鶏	牝鶏
感想	個人の優しさと集団の残酷とは違う	「人間は死ぬ時には善良になるものだ、人間の性情は一定不変のものではなく同じものが時に良く時に悪くなるのだ」というような「人間」への形而上学的な思考

中島は小説としての「鶏」を創作する際、多少土方の日記から取った材料を変更することがある。主な変更は以下のようなものである。

まず、前置きを設け、島民には不思議なところを持っていると伏線を敷く。

次に、お爺さんを二人の人物（小道具を作る人・時計を盗む人）から統合し、それに伴って主人公にかかわる「事件」を書き加える。第一に、小道具製作の謝礼がエスカレートするばかりでなく、贖物を持ってくるような不誠実な性格の持ち主に書き換える。第二に、「神様事件」を通して、お金欲しさに親しい友人まで裏切るような下劣な人間像を作る。第三に、違う人による時計窃盗事件を借りることによって、お爺さんの欲深さと若悪を際立たせる。これによって、お爺さんの人物像は、土方の「正直」で、「恐ろしげな顔とは似てもつかない優しい心」を持つ人から「よくニヤリと笑う奸悪、貪欲」な人に変更された。

更に、お爺さんに対する態度は「感謝、感動」から「嫌悪」になり、さらに「彼の奸悪と鶏の贈り物とは調和できない」と思うように書き直す。まとめの感想のところにおいては、土方は「個人の優しさと集団の残酷とは違う」というふうに人間の「優しさ」を認めている。それに対し、中島は心象に残ったお爺さんの奸悪さと貴重な鶏の贈り物とは調和できず、「人間は死ぬ時には善良になるものだ」、「人間の性情は一定不変のものではなく同じものが時に良く時に悪くなるのだ」というふうに、「人間」に対する形而上学的な認識は深刻なものである。

岡谷氏は中島敦が土方久功の文章に対する変更について、次のように記している⁽¹³⁾。

『南島譚』が出版された時、敦は、この本を久功に贈ろうとはしなかった。久功は、敦の死後、未亡人から「あれははずかしいから土方さんにはあげない」という敦の言葉を知らされる。

久功の詩集『青蜥蜴の夢』に収められている「ナポレオン」と「鶏」を、敦の同名の短編と読みくらべると、敦の感じた恥ずかしさがよくわかる。これは、久功のものの方がすぐれている、ということの意味するものではない。いや、文章といい、構造といい、鋭い観察眼といい、敦の作品の方がずっと読者を惹きつけるものをもっている。それにもかかわらず、久功の文章に滲んでいる南洋体験の深さは、敦にはどうしようもないものだ。自分の体験の腰のきまらなさを思い合わせる時、敦には、久功の

眼を怖れるだけのものが確かにあったのである。

岡谷氏に指摘されているように、中島は「南洋体験の深さ」という点では当然土方と比べものにならないが、「鶏」などの作品は、土方の日記から取材し、すぐれた「文章」と「構造」、および「鋭い観察眼」によって、「読者を惹きつけるもの」に書き直したのである。

(四) 南洋作品の形成

「鶏」という作品については、中島はお爺さんを欲深い人と優しい心の持ち主という矛盾した二面性を持つ人物に変更することによって、人間の内面を追究する作品に仕上げたのである。「人間は死ぬ時には善良になるものだ」とは、『論語』泰伯にある言葉、「鳥之将死、其鳴也哀；人之将死、其言也善」（鳥のまさに死なんとするや、その鳴くこと哀し。人のまさに死なんとするや、その言うこと善し）⁽¹⁴⁾を連想させる。そして、「人間の性情は一定不変のものではなく同じものが時に良く時に悪くなるのだ」という人間の性情の変化については、『論語』、『孟子』、『老子』などの漢籍に多く論じられている問題である。

ほかに、同じく「南島譚」という総題の下に収められている「幸福」は、『列子』周穆王第8章の物語とは、筋とテーマがほぼ同じである。しかし、作品の中に描かれている具体的な南洋の生活や食べ物などは、土方から得るところが多い。たとえば、中島は日記に記されているように、土方から聞いた「天下の珍味は、海亀の脂に極まる由」（1941年12月22日）や、「蜻りの話頗る面白し」（1942年1月1日）などの情報や話をすべて「幸福」の創作に生かしている。そして、「幸福」に登場する下僕は、下僕の中でも一番卑しい身分であり、物置小屋に住み、犬猫に与える餌しか食べられず、過酷な労働を強いられているものの、とても満足している。その理由は下僕の言う3つの幸運による。つまり、呼吸ができること、重労働の中には婦人の仕事が入っていないこと、鯨にやられたが、3本の足指しか喰われていないことである。これは『列子』天瑞の第7章に取上げられている人生の三楽という主張とほぼ同じではないかと考えられる。中国古典に基づき、「山月記」、「名人伝」、「弟子」、「李陵」など数多くの名作を書き残した中島敦は、『列子』周穆王を参考して「幸福」

を創作した可能性が十分あると考えられる⁽¹⁵⁾。

「鶏」などの南洋作品の創作は、土方久功の日記や記録から素材を得るところが大きい。中島は小説の素材を取捨選択する際に、人間の本質を深く探るものにしたのであろう。これらの人間観察はしばしば漢籍の名句を思い出させる。漢文の素養の深い中島敦は意識的に、あるいは無意識的に漢籍との関連のある素材にした可能性は否定できない。

三、土方久功の考えに対する共感

中島が南洋庁に滞在した時の日記及び土方の南洋日記によると、中島は土方と一緒に1942年1月17日から31日までパラオ本島を一周する旅をした。土方の中島との旅を記録する日記は「トンちゃんとの旅」と題をつけて『土方久功著作集』第6巻(1991年11月)に収録されている。その1月23日の日記の最後のところに、五七調に整えている詩が13首も並べられている。いくつか引用する。

○緒土のまだら禿山打ち続くかぎり

かたくなにねじけタコの木まばらまばらに

○禿山のタコの木はあわれ 風にふかれて

曲り曲り ねじけて枯れぬ タコの木はよらし

○月読の光のたのみ 禿山道に

タコの木の声か聞かんと 迷いて出でける (下線は引用者)

「タコの木」(「蛸樹」という表現は、13首のうち、11首に現れ、合計14箇所もある。土方は「タコの木」に注目していたようである。

中島も同じく「たこの木」を好んで描いていた。彼は南洋庁に滞在していた間に発表したエッセイ「章魚木」(『南洋群島』1942年3月号)にも違う場所に生えている「たこの木」を描いている。このエッセイにおいて、中島は「たこの木」の姿勢を人間の生き方に喩え、気概があり、飄然とした「たこの木」を賛美する一方、順応的な態度を示しているものを批判している。また、遺

稿としては発表されたエッセイ「章魚木の下で」(『新創作』1943年1月新年号)にも「章魚木」も多く登場し、「章魚木」を南洋のシンボルとして考えていたといえる。

南洋では代表的な植物はタコの木ではないが、中島は土方と同じく「章魚木」(「蛸樹」「タコの木」「たこの木」)に注目し、二人の作品や文章に頻出しているところから、土方と中島の考え方、少なくとも南洋に対する認識が似ていることは推測できよう。

そして、画家丸木俊(旧名赤松俊子)は自伝『女絵かきの誕生』(朝日新聞社、1977年8月)で、「島を統治する日本のやり方がひどいと、たいへん憤慨していました」と、土方についての回想を書き残している。中島も日本の南洋植民地政策に対して大いに不満を抱えていた。これは彼の家族宛の書簡や手帳のメモからはっきりと読み取れる。たとえば、1941年12月2日付きで妻タカ宛の書簡には、「この公学校の教育は、ずるぶん、ハゲシイ(といふよりヒドイ)教育だ。まるで人間の子をあつかつてみるとは思へない」と書いている。また、1941年の手帳には、「奴隸的駆使に非ざる自発的労働力提供を目ざさんとす。その基礎としての道徳心養成」という南洋庁地方課における教科書編纂についての会議の内容を記している。ここから、2人とも日本の南洋植民地政策に対して批判的な姿勢を示していることがわかる。

ほかに、土方には「黒い海」⁽¹⁶⁾という詩がある。少し長くなるが、以下の1節を引用する。

(文明人の華やかな衣裳につつまれた体と
厚化粧にぬりこめられた心との間にある距離は！
それはもう簡単に正反対と言ってしまっている)

☆

あのばかばかしい戦争のおかげで
私は再び東京に帰り住んで四年
文明は相変わらずとんでもない方向を辿っている
(世の中の一番大きなあやまちはこれであろう)
物質 物質 そして闘争 殺戮 征服

原子爆弾 細菌兵器

(何と野蛮な！ 文化とは野蛮を育成させたものではない)

新兵器 新兵器の数々

そして無軌道な不倫

見えすいた嘘をごまかす政治と宣伝

極少数者と大多数者との間に深められる

極端な富と生活のひらき

少くとも文明は精神とは無関係にのさばって行く

(倫理を置き忘れて人間の価値はない)

軍備を撤廃して文化国家をめざした筈の日本も

今や再び文化を放棄して

再軍備へと逆行している

「厚化粧」をし、「華やかな衣裳」を着ている「文明人」には、「体」と「心」の間にあまりにも距離があり、「正反対」になってしまう、と素朴さに欠けている「文明人」をひどく批判している。

また、「あのばかばかしい戦争のおかげで、再び東京に帰り住んで四年」という句から、1942年3月4日に、太平洋戦争が開戦して3ヶ月目に南洋から東京に帰ってから4年後、つまり戦後1946年にこの詩を書いたと分かる。「ばかばかしい戦争」、「世の中の一番大きなあやまち」、「野蛮」、「倫理を置き忘れ」、「軍備を撤廃して文化国家をめざした筈の日本」、「再軍備へと逆行し」などの表現から、戦争を強く批判している態度がうかがえる。

この詩は土方久功が戦後書いたものなので、1942年12月に亡くなった中島敦が読んだことはないはずである。ところが、中島は戦争のさなか、国策文学が氾濫し、「戦争といふ環境のなかで、大部分の小説が文学であることを抛棄」⁽¹⁷⁾してしまっただけでなく、家計が苦しく、小さい頃から作家願望を持ち、死の床で「書きたい、書きたい」と涙をためて妻に言う中島は、戦争賛美のようなものを書かなかったのである。戦時中、明確に戦争について論説することができない時に、本物の文学作品を書くこと自体が一種の「芸術的抵抗」であったといえよう⁽¹⁸⁾。そして、中島は土方と同じく、素朴で純粋な土人に対して

深い愛情を持ち、南洋における日本政府のひどい統治と植民地政策に憤慨し、政府支配者としての役人に対する嫌悪感を抱いていることが彼の家族宛の書簡や日記から確認できる。

前述したように、南洋庁に滞在していた間、土方久功とかなり親しい友人となり、土方の日記を自由に見ることさえ許され、しかもその日記から創作の素材を取って小説を書いた中島は、土方の思想に共鳴をし、土方のこのような文明社会を批判し、文明人に欠ける素朴さを賛美する思想、また、戦争に反対する見解にも賛成していたと推測できよう。

おわりに

以上にて論じてきたように、中島敦は南洋時代から土方久功と親交を続け、また、「鶏」のような土方の日記から素材を取って創作した小説も数篇残している。本論文は土方久功の日記にある「鶏」と中島敦の同名小説「鶏」と比較し、中島の変更箇所を確認したところ、土方の南洋群島についての記録が中島の南洋作品の源であるといえよう。その背景には、中島は土方の日本政府に対する憤慨や彼の素朴さへの共鳴があったと考えられる。土方から影響を受けていたと同時に、漢文の素養の深い中島は、小説の素材を取捨選択する際に、意識的に、あるいは無意識的に漢籍との関連のある素材を用いた可能性は否定できない。

今回は「鶏」を取り上げているが、今後、中島敦の南洋経験と南洋作品にスポットライトをあて、その作品形成および当時文壇に与えた影響と意義を探求していきたい。

注

- (1) 岡谷公二著『南海漂泊——土方久功の生涯——』（河出書房新社、1990年8月）
- (2) 1941年9月13日付で父田人宛の書簡
- (3) 土方久功「トン」、『土方久功著作集』第6巻（三一書房、1991年11月）に所収
- (4) 岡谷公二著『南洋漂蕩——ミクロネシアに魅せられた土方久功・杉浦佐助・中島敦』富山房インターナショナル、2007年11月
- (5) 土方久功「パラオでのトンと私」、『土方久功著作集』第6巻（三一書房、1991年11月）に所収

- (6) 注1と注4の岡谷公二氏前掲書
- (7) 『日本近代文学大事典』（講談社、1977年11月）第5巻によると、「炬火」は文芸雑誌で、1939年11月～1941年8月（9号）まで確認できる。編集人は茂見義高の後に久富治躬、速水良祐が務めた。炬火発行所発行。昭和10年代の早大系の同人誌であるという。
- (8) 注1の岡谷公二氏前掲書
- (9) 鷲只雄「龍之介と中島敦」、『芥川龍之介全集』（岩波書店、1996年11月）第13巻月報に所収
- (10) 『中島敦全集1』（筑摩書房、2001年10月）の川村湊氏による解説においても、「これらの作品（『南島譚』に収めた「幸福」「夫婦」「鶏」3篇を指す。引用者註）の素材については、パラオで知り合って無二の親友となった詩人・彫刻家・民俗学者の土方久功に負うところが大きい」と書いてある。
- (11) 拙著『新しい中島敦像——その苦悩・遍歴・救済』（桜美林大学北東アジア総合研究所、2011年3月）を参照
- (12) 岡谷公二氏は「「幸福」「夫婦」「鶏」「寂しい島」「ナポレオン」の五篇は、あきらかに久功から材を得たものであり、とくに後の三篇は、久功の日記にほぼ同一の話が記されている」と指摘している。同注1 岡谷公二氏前掲書
- (13) 『土方久功著作集』第6巻（三一書房、1991年11月）
- (14) 吉田賢抗著『新釈漢文大系 論語』明治書院、2012年7月
- (15) 注11 前掲書を参照
- (16) 注13 前掲書に所収
- (17) 荒正人は中島敦について、「戦争といふ環境のなかで、大部分の小説が文学であることを抛棄してゐたときなので、それは際立つて香気つよい印象を残した」と回想している。荒正人「中島敦氏のこと」、「中島敦全集通信、第1号」、『中島敦研究』（筑摩書房、1978年2月）に所収
- (18) 注11 前掲書を参照

<ABSTRACT>

The influence from Hijikata Hisakatsu in the South sea's works of Nakajima Atsushi

YAN Yu

Nakajima Atsushi went to the South Pacific Mandate from June,1941 to March,1942, and made friends with Hijikata Hisakatsu (土方久功 1900 ~ 1977) who is both a specialist in South sea and a engraver. Nakajima got a lot of materials from Hijikata's records about South sea. For example, Nakajima's "Chicken" is based on Hijikata's "Chicken" in his diary.

The main purpose of this paper is to investigate the influence of Hijikata in the Nakajima's works about South sea. We compare Nakajima' "Chicken" and Hijikata's "Chicken", then we analyse the modifications of Nakajima's "Chicken". As a result we clarify that Hijikata's records are the source of Nakajima's works about South sea. On the other hand, Nakajima, who is well-grounded in classical Chinese book, used some contents in Chinese book consciously or unconsciously in his creations.